

暮鳥の世界

この夏、武蔵野大学の公開講座で「近代詩と宗教」という授業を五回ほど担当した。詩人でも文芸評論家でもない身ではあるが、宗教の視点から読み直してみたかったのだ。ごく地味な企画なのに、意外にも中高年の二十人ほどが参加してくださった。

宮沢賢治や八木重吉や金子みすゞを読んでいく中で、とりわけ山村暮鳥が新鮮だった。大正の詩壇にモダンで斬新な詩集「聖三稜玻璃」を発表して脚光を浴びた詩人である。たとえば「いちめんのなのはな」という平仮名を一面に敷き詰めた作品「風景——純銀もざいく」が載っているし、次の「曲線」という不思議な詩もある。(以下

善	南
財	無

菅原伸郎

の引用はいずれも思潮社版『山村暮鳥詩集』からです)

みなそのひるすぎ

走る自働車

魚をのせ

かつ轢き殺し

麗かな騷擾さわぎをのこし。

一八八四年に群馬県で生まれた暮鳥は、十八歳のときに洗礼を受けた。そ

の後、聖公会の伝道師となって秋田県や茨城県で布教しており、若いころはキリスト教色の強い詩が多かった。しかし、三十歳ごろに人生の転機となる挫折と回心を経験したようで、モダンで野心的な詩風は一変する。子ども向けともいえるような、平易な表現が多くなる。詩集「雲」には連作「月」があり、こんな小品も載っていた。

くれがたの庭掃除

それがすむのをまつてゐたのか

すぐうしろに

月は音もなく

のつそりとでてゐた

田舎町に赴任していた暮鳥は、土地の人々になかなか相手にされなかつたはずだ。夕暮れ、寂しい気持ちで教会

の前庭を掃いていたのだろう。やれやれ、終わった、と振り返ると、真ん丸い月が出ていた、というのである。待ち構えていて、あるいは求め求めて昇ってきた月ではない。気がつく、のっそりと、後ろに、出ていたのだ。

この詩を読んで、法然上人の《月影の至らぬ里はなけれども 眺むる人の心にぞ澄む》（続千載和歌集）を思い出した。浄土宗の宗歌であり、詞書によれば《光明は遍く十方の世界を照らし、念仏の衆生を撰取して捨てたまわすの心を》をうたったとされるが、現代人には少し分かりにくくなっている。また、月を眺めさえすれば必ず救われるとしても、月を眺めない、つまり念仏をしない衆生はどうなるのか、という問いが出るかもしれない。その点、暮鳥の詩では、掃除三昧で過ごし

ていた男の後ろにも月はおおらかに昇っており、いつそその普遍性が表れているように思う。

山村暮鳥は晩年、正統的なキリスト教を離れていたらしい。《なんじみずからを外に求むなかれ》と説いた米国の思想家 R・W・エマソンを読み、老荘の思想にも親しんでいたようだ。肺結核のために四十歳で亡くなる直前の

手紙には《この頃、自分は華嚴経を読んだ。すばらしいものだね。仏教にはもうおどろくばかりだ。いまは正法眼蔵をよんでいる。もうたまらない。大きなものはみんな隠れてゐるんだね》と書いていた。

といってキリスト教を捨てたわけでもないのだが、そんな背景があったためか、日本のキリスト者は暮鳥にあまり関心を示さない。仏教者も「あの人はクリスチャンだから」と敬遠してきた。しかし、先の詩で分かるように、実は、東西の宗教を深く学ぼうとした先駆者だったのだ。もう少し注目されてもいいように思うがどうだろう。そして、ほかにもそうした隠れた詩人がいれば、読者のみなさまとともに発掘していきたいと思う。

（すがわら・のおお／ジャーナリスト）

